2011.3.11 東日本大震災

今日を生きる私たちが伝えたいこと

あれから十数年—
街と人のあゆみ、
復興の道しるべ。

復興庁

いつだって、人のチカラで立ち上がれる。

数時間後も、明日も、来年も、
この街も、私も、家族も、
どうなるのか分からなかった。

世の中は、案外簡単に止まるんだなと
思ったあの日。

取り返しのつかない後悔に
ずっとずっと自問自答し、
生かされてきた私たち。

あれから10年以上の月日が経った。

自分の家がどこにあったのか
分からなくなってしまったけれど、

でも絶望しかなかったこの街に、
新しい店が増えた、新しい家が建った、
新しい居場所ができた、
今まで見たことのない人たちの
明るい声が聞こえてきた。

— Build Back Better

前よりも強く、しなやかに、
今日を生きる私たちが伝えたいこと。

誰かの光となれるように。
人びとのあゆみを辿っていこう。

文=ジェンティーレ恵［けい］

宮城県名取市閖上出身。
東京の出版社勤務を経て宮城移住後、
フリーの編集者・ライターとして独立。
現在も被災地に住みながら、被災者の声を集め、
伝承・復興の道のりを取材し、日々震災と向き合う。

CONTENTS

-04 特集 震災伝承と復興
この街を伝えていく
～3.11から今日までのあゆみ～

04 岩手 大槌町
「一般社団法人 おらが大槌夢広場」神谷未生さん

10 宮城 名取市 閖上
「一般社団法人 ふらむ名取」格井直光さん

16 福島 富岡町
「NPO法人 富岡町3・11を語る会」青木淑子さん

-22 東北のアタラシイモノたち。

-24 東北のアタラシイコトたち。

-26 私たちの伝承のカタチ
～文化とアートの可能性～

1

4 3 2

1：多くの観光客でにぎわう「シーパルピア女川」（宮城県女川町）
2：「がんばろう！石巻」看板前に書かれたメッセージ（宮城県石巻市）
3：震災後に「東北六魂祭」で披露された「盛岡さんさ踊り」（岩手県）
4：逆境から立ち上がり再スタートを切った「請戸漁港」（福島県浪江町）

この街を伝えていく
～3.11から今日までのあゆみ～

2011年3月11日に発生した東日本大震災は
私たちから本当に多くのものを奪い去った。
それでも涙を拭いて、
私たちは立ち上がり、今を生きている。
岩手・宮城・福島の3県で
震災伝承や復興に尽力する人びとに
これまでのあゆみと想いを伺った。

文=ジェンティーレ恵　写真=小野寺真希(fog)

Vol. 01

Iwate, Otsuchi

一般社団法人 おらが大槌夢広場（おおつちゆめひろば）

岩手 大槌町（おおつちちょう）

Through My Eyes, Voices of Hope
～伝えたい、未来を照らす言葉～

**“内からも外からも
いろんな価値観に触れる
そして人は、街は、成長する”**

答え合わせの10年だったように思う。災害派遣ではじめて大槌町に降り立ったとき、町は壊滅状態だった。津波による被害もそうだが、火災が起き、焼け野原のように町中に焦げた臭いが立ち込めていた。「戦場のような、教科書の写真でしか見ないような光景…。ここには津波が来たんだと自分で何度も思い出さないといけないくらい、町が焼け焦げてしまっていたんです」

大槌町は岩手県内の被災自治体のなかでも最も高い犠牲者率となり、震災で首長が犠牲となった唯一の自治体とも言われている。町役場では町長を含め、職員の約20%にあたる40名(※)が犠牲となり、幹部の大半も失い、行政機能は混乱を極めていた。

※震災関連死も含む

言語化できない人と人のつながりを見た

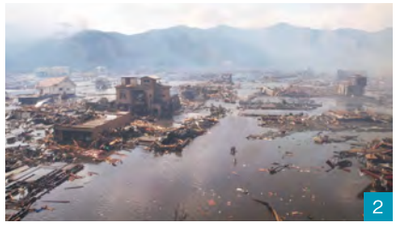
国際NGOの職員として派遣された神谷さんは、毎日2時間かけて内陸の町から通い、被災者の支援に回った。全国から送られてくるさまざまな支援物資を取り分けて、本当に必要な人のもとに再配達したり、ボランティアセンターの立ち上げ・運営などを担ったりした。「勝手なイメージでしたが、被災者の方はとても落ち込んでいるんじゃないかと思っていたんです。でも私がお会いした方々は、なぜか明るく接してくださいました。避難所を回って会う人みんな、『また大槌再建すっからな』って前向きな人が多くて。この町の状況を見て何でそんなことが言えるのか、不思議だったんですよね」

震災前の大槌町は、全国にある地方自治体の例にもれず、人口減少、過疎化、少子化、漁獲量の減少といった社会問題を抱えていた。そこに震災が起こって壊滅状態となり、多くの痛みをともなった。「そこまでして再建したい町って何なのか？ やっぱりそれでもここがいいって何で言えるのだろうか？」。地下水脈のようにこの町に流れる〝何か〟。名古屋の大都市出身のためか、〝故郷（ふるさと）〟というものに思い入れが薄いという神谷さんに、その問いが反芻（はんすう）された。

一般社団法人
おらが大槌夢広場
代表理事・事務局長

神谷 未生さん
KAMITANI MIO

名古屋出身。国際看護師として途上国医療に携わり、東日本大震災では国際NGOから大槌町に派遣され支援活動を行った。その縁がきっかけで大槌町に移住し、「おらが大槌夢広場」に参加、3代目代表理事に就任。“大槌人”と結婚し、現在1児の母。



1:高さ約10mの津波に襲われた大槌町役場の旧庁舎跡地
2:火災が起き、黒い煙が発生した被災後の町（画像提供：大槌町震災アーカイブ/大槌町）

この町をつなぐ想い

高台にある城山公園より町を見下ろす

途上国支援での経験 使命感に動かされ町へ

神谷さんの経歴はきっと華々しく映るだろう。それゆえ、誤解も反発も、〝よそ者〟としての居づらさも感じてきた。高校卒業後は単身アメリカへ渡り、医療系の大学で看護師免許を取得。現地の大学病院に長らく勤め、テキサス州で経験を積みながら、南米の途上国での医療支援にも関わるようになった。「基本的に日本が好きじゃなかったんです。学校でも、こんな面倒くさいこと言われるなら海外に出ちゃえ！って…若気の至りですよね。当時は日本と決別するような気持ちでした」

2011年3月11日は、青年海外協力隊として赴任したベトナムにいた。ちょうど派遣期間が終了する直前のことで、異国の地から日本のニュースを見つめるしかなかった。同年の9月にはイギリスへの大学院進学が決まっていたが、4月に帰国してから留学するまでの間、被災地支援を行う国際NGOの契約職員となり、大槌町へ派遣されることとなった。

1年の留学生活を終え、日本に戻ってくると、すでにこの町には町民有志による「おらが大槌夢広場」の団体が立ち上がっていた。「被災者が仮設住宅に引っ越しはじめた時期に町を離れることとなって、どこかうしろめたさがありました。日本に帰ってきて、町がどうなっているのか、もう一度行ってみようと。団体のほうでも求人があったのですが、給料をもらうのは申し訳ないと思って、NPO法人ETIC.（えてぃっく）のリーダー支援プロジェクトを利用して再び派遣してもらいました」

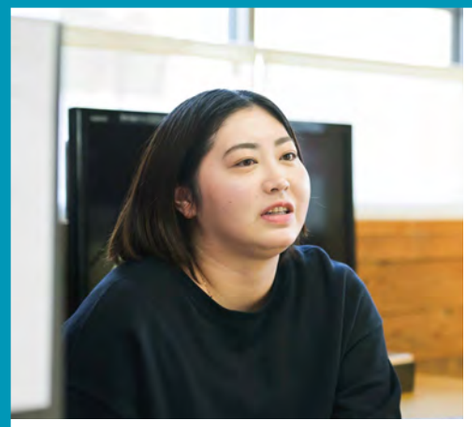
復興にかけるエネルギーを結集して誕生

「おらが大槌夢広場」は、「大槌に人びとが笑い合い、安らげる場を作りたい」という想いと、「大槌の復興を担う民間の団体が必要だ」という想いが原点だ。最初は町民、支援者、建設コンサルタントなどが集い、「おらが大槌復興食堂」や「いわて三陸夢会議」と題したフォーラムなどを開催した。復興やまちづくりに意欲がありそうな人がいると聞きつければ足を運び、仲間づくりに奔走した。のちに初代代表理事となった阿部敬一（あべけいいち）さんは、震災前から町の閉塞感を憂い、「大槌にはもっと町民がおもしろがれる何かが必要だ」と感じ、〝大槌でやりたい夢〟を友人や町の人たちと語り合っていた。そういったエネルギーをもった人びとが町内外から結集し、震災から約8カ月後、団体は設立された。

それからの団体のあゆみは今日に至るまで、人びとの想いと外部を取り巻く環境が交錯し、波が繰り返し押し寄せては引いていくように、絶えず形を変えながら続いてきた。神谷さんが再び町に戻り、団体に参加したときも、メンバーは岐路に立たされていた。震災から間もない時期の使命感や高揚感で立ち上がったが、建物の取り壊しや退去が迫る町の現状、20人規模となった雇用を維持するための事業、それぞれが抱（いだ）いている夢…。歯車が噛み合わず、今の体制に限界を感じていることを正直に打ち明けられた。

立て直しを図った神谷さんだったが、海外経験で培った効率重視の働き方、日本のしきたりや礼儀に沿わない振舞いで孤立することも多かった。それでも神谷さんは対話を重ね続けることで、共通のビジョンを導き出そうとした。

「雇用を維持するための事業でいっぱいになってしまうと、自分たちが本当にやりたいまちづくりもできなくなる。〝おらが〟の存在意義は何だった？ とみんなで再確認をしたのです」



地域おこし協力隊事務局事業を担当する平松和希さんは、狭く息苦しいと思っていた大槌町を一度は離れ、東京の大学に通った。それでも地元に帰ると心が休まる自分に気づいたという

〝おらが〟がある限り 自分たちの意志は残る

現在、3代目の代表理事となった神谷さんのまわりは、地元出身の子育てママや若者たちでにぎやかだ。手がける事業は伝承活動を行う「ツーリズム事業」や「地域おこし協力隊事務局事業」のほか、町の「移住定住事務局事業」など多岐にわたる。

一時は団体の解散危機もあったが、紡がれてきた想いが途絶えぬよう、神谷さんは一人意志を継いだ。「町ではいろんな復興事業が終わりつつあり、同時に関係人口拡大など別の角度からの事業が立ち上がっていました。〝おらが〟のビジョンをみんなで再確認したとき、『人が人を育て、人がまちを育てる』という言葉が出てきました。やっぱり人が育たないと、まちは育たない。人が育つためにはいろんな価値観に触れ、刺激を受け、成長することが大切。自然と、人の交流が生まれる事業に導かれていきました」

ツーリズム事業を担当する大槌町出身の五十嵐蘭さん。3児を育てるママで、現在は隣町から出勤している。「この町にいることで、語り部をすることで、大好きだった昔の町を思い出すことができる」と語る

地元出身、子育て世代、若者、よそ者…幸せに働ける環境が「人」を呼び込む

仕事場は笑顔であふれ、アットホームな空気感が魅力だ

“おらが”の働き方は完全フレックス。何時に出勤しようが、退勤しようがすべて各人に委ねられている。メンバーのほとんどは女性で、子育て中のママも多い。「人口流出が拡大する大槌町ですが、なかでも若い女性の流出率が高いんです。働きやすい職場が増えれば、もっとみんなが町にいたくなるはず」と神谷さん。住んでいる人も、新しく来る人も、みんなが幸せになれる場所づくりを自らが体現している。

町中心部に事務所を構える

事務局で発行した「移住定住ガイドブック」

1:2011年11月にオープンした「おらが大槌復興食堂」（画像提供：大槌町震災アーカイブ/大槌町）

2:団体設立のきっかけとなった「いわて三陸夢会議」（2011年7月）の様子（画像提供：大槌町震災アーカイブ/株式会社邑計画事務所）

海が見えなかった――後世に伝えたいこの町のこと

大槌町のある三陸の海は、岬と入り江が連続するリアス海岸が特徴で、森のミネラルをたっぷり含んだ水が絶えず海へ注がれている。エメラルドブルーに透き通った海面をのぞき込むと、岩場にびっしりとウニが見えた。海産物はもちろん、ほかにも町のシンボルと言えば大槌湾内に浮かぶ『蓬莱島（ほうらいじま）』だ。ひょうたんの形をしたこの島は「ひょっこりひょうたん島」のモデルになったとも言われ、駅前にも像が立つなど町を盛り上げている。

神谷さんに連れられて、町の中心部を歩いていると巨大な堤防が真っ先に視界に入ってきた。震災前には高さ6・4mだった堤防は、震災後に14・5mになった。「ここにいると、海に近いという感覚がしないでしょう？ 堤防のすぐ先に海があると分かっているはずなのに、町の人たちもまさかここまで来ないだろうと、逃げ遅れた方がたくさんいらっしゃいました。私たちはどうしても震災の映像や写真を見て、『どうして逃げなかったの』と思ってしまうんですが、ここに身を置けば、実際あなたも逃げないかもしれない。人間の心理が分かるような気もします」

団体の柱となっているツーリズム事業では、震災“を”ではなく、震災“から”学ぶアクティブラーニングというメソッドを提供している。例えば「決断のワークショップ」というプログラムは、参加者に町職員や都市整備課長といった架空の役割を与え、町民たちがリアルに体験した被災時や復興期の課題について意見を出し合い、決断を下すというもの。正解のない問いに向き合うことで、「自分だったらどうするか」を突き詰め、自分ごととして捉えることができる。大手企業の社内研修にも採用されるようになり、団体発足時から大切に磨き上げてきたコンテンツが、今も着実に花を咲かせている。

1:震災後に高さ14,5mとなった堤防がそびえ立つ
2:赤浜地区の漁港には釣り人も訪れる
3:町のシンボル「蓬莱島」
4:1時間に1本ほど三陸鉄道の車両が町を通る
5:水面がきらめく三陸の海

これが故郷（ふるさと）の原風景 脈々と紡がれる人びとの想い

神谷さんがはじめて大槌町に訪れてから10年以上の月日が経った。現在は、同じ団体職員だった大槌出身の男性と結婚し、一男をもうけ、家族とともに町で暮らしている。「大槌に虎舞（とらまい）と鹿子踊（ししおどり）という郷土芸能があるんです。人口1万人ほどの町なのに、継承する団体がいくつもあって、町外に住んでいる人もこのお祭りだけは帰ってくるほどで。子どもの名前に“虎”をつける人がいるくらい熱いんですよ（笑）。そういうのを見ていると、老若男女で多世代間のつながりが元々できていたんだろうなって。だから復興に気持ちを向けられる一助にもなったんだと思うんです。この原風景を見ていると、故郷（ふるさと）に戻りたいっていう気持ちがようやく分かりました」

あの当時、自分のなかで咀嚼（そしゃく）できなかった“故郷（ふるさと）”の意味――。神谷さんにとってはじめての感覚を、この町が教えてくれた。

郷土芸能の「虎舞」（画像提供：大槌町震災アーカイブ/大槌町）

一般社団法人 おらが大槌夢広場

団体の概要

町民や専門家が結集し、町の復興支援や地域活性化を目的に2011年11月に設立。現在は地域住民が主体となって多彩な事業を展開し、震災伝承に取り組むツーリズム事業では、疑似体験やワークショップを通して“問い”と向き合うプログラムを提供している。

語り部申込先

連絡先 ▶ 080-8209-2330（神谷さん直通）
住所 ▶ ［事務所］岩手県大槌町末広町9-29
集合場所までのアクセス ▶ ［大槌町文化交流センター］三陸鉄道大槌駅から徒歩7分 ※事務所所在地とは異なる
料金 ▶ 町内ガイド（60～120分） 1～5名5,500円/団体、6名～1,100円/人
実施日・時間 ▶ 予約時に要相談 ※1週間前までにホームページより要予約

公式ホームページ

おらが大槌夢広場の伝承プログラムに参加しよう

Q プログラムの内容は？

A 大槌町文化交流センターに集合し、はじめに震災資料やビデオ鑑賞を行い、旧庁舎跡地や高台より復興現場を一望。最後に蓬莱島を歩いて巡る。

Q 車がないと参加できない？

A 参加者自身の車またはバスにガイドが同乗して案内するのが基本だが、車がない場合は相談可能。

Q 参加の前後で巡れるおすすめスポットは？

A 周辺の町には道の駅が点在しており、三陸沿岸道路で気軽にアクセスできるのでおすすめ。

今 声を聞きに行こう。

岩手県の震災伝承施設

東北の被災地では、震災の記憶や教訓を伝える「震災伝承施設」が各地に整備されている。より理解を深めるため、ぜひ訪れてみよう。

陸前高田市 大槌町から車で50分

東日本大震災津波伝承館（いわてTSUNAMIメモリアル）

「命を守り、海と大地と共に生きる」をテーマに、震災津波の事実と教訓を共有し、支援への感謝と共に復興の姿を国内外に発信。館内は「歴史をひもとく」「事実を知る」「教訓を学ぶ」「復興を共に進める」の4ゾーンに分かれ、約150点の豊富な資料を見学できる。

［TEL］0192-47-4455 ［住所］岩手県陸前高田市気仙町土手影180 ［アクセス］JR大船渡線BRT奇跡の一本松駅からすぐ ［料金］入館無料 ［営業時間］9～17時（最終入館は16時30分） ［定休日］無休（臨時休館あり） ［駐車場］140台

釜石市 大槌町から車で10分

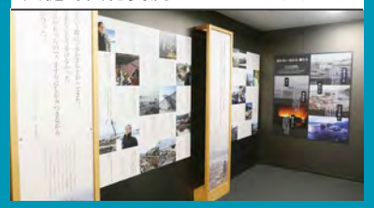
いのちをつなぐ未来館

鵜住居（うのすまい）駅前の「うのすまい・トモス」にあり、展示室や資料閲覧室、防災学習室を備える。防災ワークショップや団体向けの防災研修など多彩なプログラムも用意。地元の小・中学生が実際に避難した道を追体験するプログラムは、震災当時の出来事を肌で感じとれる。

［TEL］0193-27-5666（うのすまい・トモス） ［住所］岩手県釜石市鵜住居町4-901-2 ［アクセス］三陸鉄道鵜住居駅からすぐ ［料金］入館無料（体験プログラムは有料） ［営業時間］9時30分～17時30分（11～2月は～17時） ［定休日］水曜 ［駐車場］100台

大槌町 大槌町内

大槌町文化交流センター おしゃっち



津波によって全壊した町立図書館や集会施設などの機能を集約して開館した多目的施設。エントランスホールには、町民が自分たちの想いを書き込んで制作した震災前の町並みの模型を展示。2階震災伝承展示室では、写真や映像などで震災時の様子を知ることができる。

［TEL］0193-27-5181 ［住所］岩手県大槌町末広町1-15 ［アクセス］三陸鉄道大槌駅から徒歩7分 ［料金］入館無料 ［営業時間］9～21時 ［定休日］火曜 ［駐車場］76台

この街を伝えていく ～3.11から今日までのあゆみ～

Miyagi, Natori, Yuriage

Vol. 02

一般社団法人 ふらむ名取

宮城 名取市 閖上（なとりし ゆりあげ）

Through My Eyes, Voices of Hope
～伝えたい、未来を照らす言葉～

“生きがいや喜びを感じられるのは自分の足で歩くからこそ”

避難先の体育館―。格井さん一家が身を寄せ合ったスペースは、しっかりと閉まりきらない冷たい金属のドアの前だった。まだ雪降る3月のすきま風は無慈悲で、身にも心にも堪えた。「このままじゃダメだわ…」。知人を頼って駅前のマンションを借りた格井さんは、見つからない両親を捜し続けながら、生活再建に向けて一歩を踏み出した。震災からわずか3週間のことだった。

両親は数カ月後、DNA鑑定をもって発見された。葬式の段取りを進め、ひとつの区切りを迎えると、ふと町の様子が気になった。それまでは、正直、町のことよりも自分の生活再建のほうが優先だった。市では専門家や住民代表で構成される復興計画プロジェクトが進んでいたが、まちづくりはできる人たちに任せればいい、そう思っていた。でも聞くと、閖上は集団移転ではなく、現地再建を目指すのだという。「私が住んでいた場所は危険区域に指定されて、同じ土地に再建することは不可能。じゃあ家はどうなるの？って分からないことだらけで。それで疑問を解決するためにいろんな情報を集めはじめたんです」

一般社団法人 ふらむ名取
『閖上復興だより』
『閖上だより』
編集長

格井 直光さん
KAKUI NAOMITSU

『閖上復興だより』/『閖上だより』（2011年10月～）編集長、「閖上震災を伝える会」（2012年3月～）代表を兼務。2017年4月に一般社団法人「ふらむ名取」代表理事に就任。2018年3月に定年退職し、現在も精力的に震災伝承やコミュニティ支援活動を行っている。閖上出身。

1:がれきが津波によって押し寄せ、壊滅状態となった閖上地区（画像提供：東北地方整備局震災伝承館）
2:市内の学校に開設された避難所（画像提供：名取市）

3:富主姫（とみぬしひめ）神社が鎮座する日和山。ロシナンテスの支援のもと「閖上桜」が新たに植樹され、御社（おやしろ）も再建された
4:全国からボランティアが集結し、閖上の復興を支えた
5:ロシナンテスが企画し2011年7月に行われた「閖上・スーダン大運動会」（画像提供：名取市）

認定NPO法人 ロシナンテス

アフリカ・スーダンで医療支援を行う福岡県北九州市の認定NPO法人。東日本大震災では発生3日後に現地入りし、名取市を拠点に県南の町でのがれき撤去作業、避難所での健康管理、レクリエーション事業などさまざまな支援活動を行った。

復興計画について集会をやるから来てみないか？

医療ボランティアとして名取市を拠点に支援活動を行っていた認定NPO法人ロシナンテスの川原医師と格井さんは出会った。「どうする閖上」と名付けられた会議は、避難所の体育館で毎週金曜日に開かれ、有識者の意見にとらわれずに住民主体で話し合われるものだった。参加したメンバーは過去の事例に学ぼうと、ロシナンテスとともに2011年8月、福岡県西方沖地震の被災地である玄界島（げんかいじま）に復興の視察で訪れた。「その報告会で〝玄界島復興だより〟を目にしたんです。地域の新聞で、住民目線で復興の状況を伝えるものでした」。閖上にもこんな新聞があるといいね、そうつぶやいた一言を、隣にいた川原医師は聞いていた。当時格井さんは50代前半の現役の会社員。編集経験はゼロに等しかったが、背中を押される形で有志のメンバーとともに手探りの新聞制作が始まった。

海の方角から町を望む。船が停留する漁港は、閖上を代表する風景のひとつだ

人と人のつながりを大切に

ふらむ名取の活動の原点となった「閖上復興いも煮会 ～みんなございん！」

「閖上で一番盛り上がる行事は何ですか？」ロシナンテスメンバーの問いかけに、数々の思い出がよみがえる住民たち。そして離れ離れになった人びとが再び顔を合わせるために、“芋煮会”は企画された。イベントでは芋煮会に加え、園児による歌のステージ、名物笹かまぼこやカレーのお振舞などが行われ、最後は閖上小学校校歌の大合唱で幕を閉じた。多くの話題を呼び、住民がつながった芋煮会はこうして大成功を収めたのであった。

仮設住宅に住む方たちが協力して芋煮を用意（画像提供：ふらむ名取）

「閖上に住むならつながりを大切に」と小さい頃両親に教わったという格井さん

みんなは今どこにいる？ 住民に新聞が届くきっかけとなった芋煮会

市内の避難所が閉鎖されると、被災者はそれぞれの場所へ散り散りになった。仮設住宅に入居する人、親族の家に身を寄せる人、地域外に新しく居を構える人。無事の知らせも、葬式の知らせも、隣近所だった人たちに伝えたくても、役所では個人情報保護の壁に阻まれ、誰がどこにいるのか知ることは難しかった。

そんななかで企画されたのが、東北では馴染み深い「芋煮会」の開催だった。「宮城の芋煮は、いわゆる豚汁に近いものなんだけどね。昔から大鍋を囲んでみんなで食べて…この地域ならではのコミュニケーションのひとつでね」。ポスターを掲示し、地元のラジオやテレビで開催の告知をし、食材や調理器具を必死でかき集めた。そして震災から半年後の9月、会場には約1000人が集まった。芋煮の引き換え券として現住所や電話番号を記入してもらい、住民の所在確認も行った。再会した住民たちは涙を流しながら肩を抱き合い、笑い声を響かせていた。のちに『閖上復興だより』第1号で刷られた1500部は、この芋煮会をきっかけにそれぞれの場所に住む閖上の人びとに配られることとなった。

住民の声をひとつにして

『閖上復興だより』の転機となった第7号。アンケートを通して住民の本心に迫った

B4両面2ページの第1号はロシナンテスが制作や費用を全面的にバックアップした。評判が評判を呼び、初版はわずか2週間で在庫がなくなるほど。継続発行のために、地元企業の広告やサポーターの寄付金を募り、自立した制作は一気に加速した。回を重ねるごとにクオリティもあがり、編集会議でテーマを決め、割付も考えた。まちづくりのこと、イベントの告知、ちょっとしたコラム。「まちづくりに関して潮目が大きく変わったのが2012年6月発行の第7号。市が開催した復興計画に関する住民説明会が紛糾し、閖上住民の本当の気持ちは何なのか、相当な費用をかけて独自アンケート企画を実施しました」

結果は第8号に掲載された。有効回答数は913、年代・地区別に分類され、住民の声が可視化された。「匿名なども含めると1400ほどの回答があり、いかに住民の関心が高かったかということが分かる。メディアからも注目され、閖上の復興に少しでも影響を与えられたと思います」

名取市にある事務所には
風土記や記録集などたくさんの資料が並ぶ。
「歴史が好きで、図書館に閖上のことを
調べに行っています」と格井さん

震災から3年後にはロシナンテスの支援を卒業し、
約15名の編集メンバーで
すべてを取り仕切るようになった
（画像提供：ふらむ名取）

“復興”の文字を背負うことその2文字を取った意味

『閖上復興だより』は2020年3月の第60号をもって役目を終え、現在はタイトルから“復興”の2文字を取って、『閖上だより』として発行を続けている。

「震災から8年が経って、2019年に閖上はまちびらきを迎え、私としては早く、“復興”の文字を取りたかった。なかには、支援されることに慣れてしまって、自ら動こうとしない人たちも見てきました。“復興だより”の格井”というのが知れ渡るようになると、私に要望や要求が投げられることもありました。自立してこそ復興。自分たちで考えて行動するのが再建への近道。だから私は新聞を作ってきました。復興の2文字を取ったのはそういう意思表示でもあります」

変わりゆく町の姿を追い続けた『閖上復興だより』/『閖上だより』

2011年10月の第1号から2020年3月の第60号まで約9年間発行し続けた『閖上復興だより』。2020年からは『閖上だより』として年に4回（春夏秋冬）届けられている。「元気であることを伝えたかった。それを見て、誰か元気をもらえる人がいればね」（格井さん）

最終号となった第60号（左）と、“復興”の2文字を取り、新たなスタートとなった『閖上だより』の第1号（右）

語り部として震災を伝えていく

一般社団法人「ふらむ名取」は、3つの団体が合流して2017年に誕生した。『閖上復興だより』、コミュニティ支援を行う「名取交流センター」、そして語り部活動を行う「閖上震災を伝える会」。閖上地区には震災当時約5700人が住んでいたが、住民の1割を超える約750名が犠牲となった。語り部活動では、なぜこれほど大きな被害が出てしまったのか、その教訓を後世に伝えようとしている。

「昭和三陸地震襲来の石碑には『地震があったら津浪の用心』と刻まれていますが、この石碑の存在はほとんど知られていませんでした。その後のチリ地震津波でも閖上には津波が来なかったという安全神話が宿ってしまった。そうして東日本大震災では、一度は避難したものの、津波は来ないだろうと避難所から自宅に戻った人びとが多く犠牲となりました。防災無線の不具合で避難指示放送ができなかったのも被害を拡大させた一因でした」

震災から10年以上が過ぎた今、人数こそ少なくなってきたが、語り部の話を聞きに訪れる人びとは絶えることはない。変わらず伝えているのはその教訓と、かつての閖上の町並みと思い出だ。「地区民運動会は閖上のメイン行事だったね。震災前最後の運動会は、本当に盛り上がったね。この時は本当に楽しかったなぁ…」

避難所での集会をきっかけにまちづくりに関心を持ち、未経験から『閖上復興だより』の編集長となり、現在は語り部活動と住民をつなぐ支援活動も行う格井さん。耳を疑うようなことを言われたこともあった。多忙を極め倒れたこともあった。それでもなお格井さんを奮い立たせたものは何だったのだろうか。「やっぱりね、前に向かっている姿を子どもたちに見てほしかったからかな。自分にできるかできないか、能力があるかないかは関係ない。前に向かっていけば何とかなるし、進まなかったら何もない。失敗してもいいから、ただ前に進んでみる、その一心だった。今も苦しむ方や、能登半島地震の被災者の方には、状況は違うけれど、前に進む大切さを伝えたいです」

1

2

3

1:「名取市震災メモリアル公園」に建てられた慰霊碑。塔の高さは、閖上を襲った津波の高さ8.4m

2:大きな被害を出した閖上の教訓を体験談とともに後世に伝える

3:公園の敷地内には閖上にあった遺構も保存されている

4:「名取市震災復興伝承館」に展示されている閖上の以前の町並みを表したジオラマ模型。住んでいた方の名前や思い出が記されている

一般社団法人 ふらむ名取

団体の概要

『閖上復興だより』「閖上震災を伝える会」「名取交流センター」の機能をひとつに結集させ2017年4月に発足。地域新聞の発行や語り部活動のほか、被災された方々のコミュニティ再生に向けて地元出身や閖上在住のメンバーとともに支援活動を行っている。

語り部申込先

連絡先 ▶ 090-3583-1359（格井さん直通）
住所 ▶ ［事務所］宮城県名取市大手町5-6-1 名取市市民活動支援センター内
集合場所までのアクセス ▶ ［名取市震災メモリアル公園］仙台東部道路名取ICから車で5分 ※事務所所在地とは異なる
料金 ▶ ポイント案内50分5,000円～
実施日・時間 ▶ 予約時に要相談 ※1週間前までに要予約

公式ホームページ

ふらむ名取「閖上震災を伝える会」の伝承プログラムに参加しよう

Q プログラムの内容は？

A 50分5000円コースは名取市震災メモリアル公園や慰霊碑、日和山を中心に案内。ほかにDVD視聴付の90分7000円コースもあり、内容は応相談でオプションをつけることも可能（料金別途）。

Q 行程をアレンジすることは可能？

A 相談の上、対応可能。希望があれば「名取市震災復興伝承館」で館内説明も提供できる。

Q 参加の前後で巡れる町のおすすめスポットは？

A 「かわまちてらす閖上」は名取川沿いにある商業施設で、地元の食や土産を楽しめる。景色も素晴らしいのでぜひ足を運ぼう。

今 声を聞きに行こう。

宮城県の震災伝承施設

東北の被災地では、震災の記憶や教訓を伝える「震災伝承施設」が各地に整備されている。より理解を深めるため、ぜひ訪れてみよう。

仙台市 閖上から車で15分
震災遺構 仙台市立荒浜小学校

発災当時、地域の指定避難所であり、児童や教職員、地域住民など320人の命を守った荒浜小学校。震災後は遺構として保存・公開されている。1～2階では損傷した姿を、4階展示室では地震発生から救助までの様子を写真と映像で知ることができる。防災教育コーナーもある。

［TEL］022-355-8517［住所］宮城県仙台市若林区荒浜新堀端32-1［アクセス］仙台東部道路仙台東ICから車で15分［料金］入館無料［営業時間］9時30分～16時（7～8月は～17時）［定休日］月曜、第4木曜（祝日の場合は開館）［駐車場］70台

名取市 閖上地区内
名取市震災復興伝承館

町を襲う津波の様子や海上で津波を乗り越える巡視船から撮影された映像、住民の証言を集めたパネルなどで震災を詳細に紹介。震災前の閖上の町並みを再現したジオラマ模型、「水圧体感ドア」「水圧を感じるゲタ」など体験型展示で防災を学べるコーナーもある。

［TEL］022-393-6520［住所］宮城県名取市閖上東1-1-1［アクセス］仙台東部道路名取ICから車で5分［料金］入館無料［営業時間］9時30分～16時30分（12～3月は10～16時）［定休日］火曜（祝日の場合は翌日）［駐車場］10台

名取市 閖上地区内
津波復興祈念資料館 閖上の記憶

旧閖上中学校のロッカーや遺品、痕跡、津波の高さが確認できるドアなど、震災の記憶を辿る展示物を常駐スタッフの案内で見学できる。若い世代への伝承も目指し、語り部プログラムの充実を図っている。「閖上案内ガイド」は90分5,000円～（20日前までに要予約）。

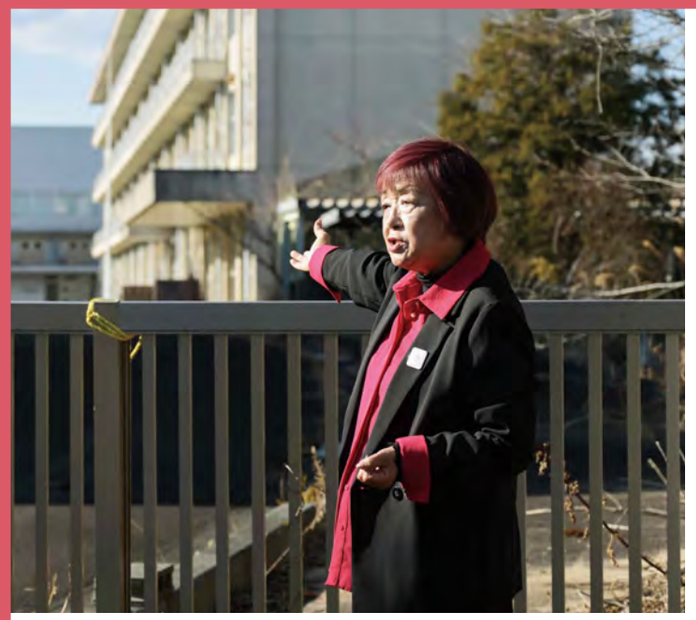
［TEL］022-738-9221（平日10～15時）［住所］宮城県名取市閖上東3-5-1［アクセス］仙台東部道路名取ICから車で5分［料金］入館無料［営業時間］10～15時（日曜、祝日は9時～）［休館日］木曜（祝日・11日の場合は開館）［駐車場］300台（朝市駐車場と共有）

この街を伝えていく ～3.11から今日までのあゆみ～

Vol. 03

Fukushima, Tomioka

NPO法人 富岡町3・11を語る会



Through My Eyes, Voices of Hope
～伝えたい、未来を照らす言葉～

“語ることは心の復興 今の生きづらさが 少しでもよくなるように”

NPO法人
富岡町3・11を語る会
代表
青木 淑子さん
AOKI YOSHIKO

福島の県立高校で国語教師として教壇に立ち、2004年に富岡高校へ校長として赴任。2008年定年退職。2015年に「富岡町3・11を語る会」を設立し、現在、語り人（べ）活動や町民劇など震災伝承の多彩な表現方法に取り組んでいる。富岡町在住。

38年にもわたる長い教員生活最後の4年間は、はじめて訪れる富岡町の富岡高校で校長として過ごした。東京出身の青木さんは、15歳のときに福島県の郡山（こおりやま）市に越してからもう半世紀以上福島にいる。大学も、就職も、福島。それでも富岡町のある太平洋沿岸の浜通り地方は、縁遠い場所だった。「辞令をもらってどこにあるんだろう？という感じでね。でも来てみるとその頃の富岡町はとてもにぎやかで元気でしたよ。原発が町に雇用を生んでいたし、研修でもこの地域がいかに安全かを説明されていたし、原発と町の関係性は私のなかでは理解できることだったんです」

赴任したその年、富岡高校は県をあげて推進する学校改革の基幹校に選ばれた。世界に通用する人材の育成を目指し、スポーツや国際分野で高度な教育が進められ、全国から生徒が集まり、のちにオリンピック選手を多数輩出するまでとなった。「何の変哲もない町でなぜ学校改革？ 突然脚光を浴びたことで、妬（ねた）み嫉（そね）みで針のむしろでした。悔しくて悔しくて何度も泣きました。でも町が変わるなら今だ。原発に依存している町なんて言われずに、この地域の未来を変えるんだ、子どもたちのために人が育つ町にするんだって、町長たちと一緒に夢を見たんです。私も本気で取り組みました」

1:現在も休校となっている富岡高校。サッカー、バドミントンの強豪校で、県立高では珍しいゴルフの練習施設もあった
2:避難所となった郡山市の「ビッグパレットふくしま」。長い車移動でガソリンも底をついていた（画像提供：郡山震災アーカイブ）

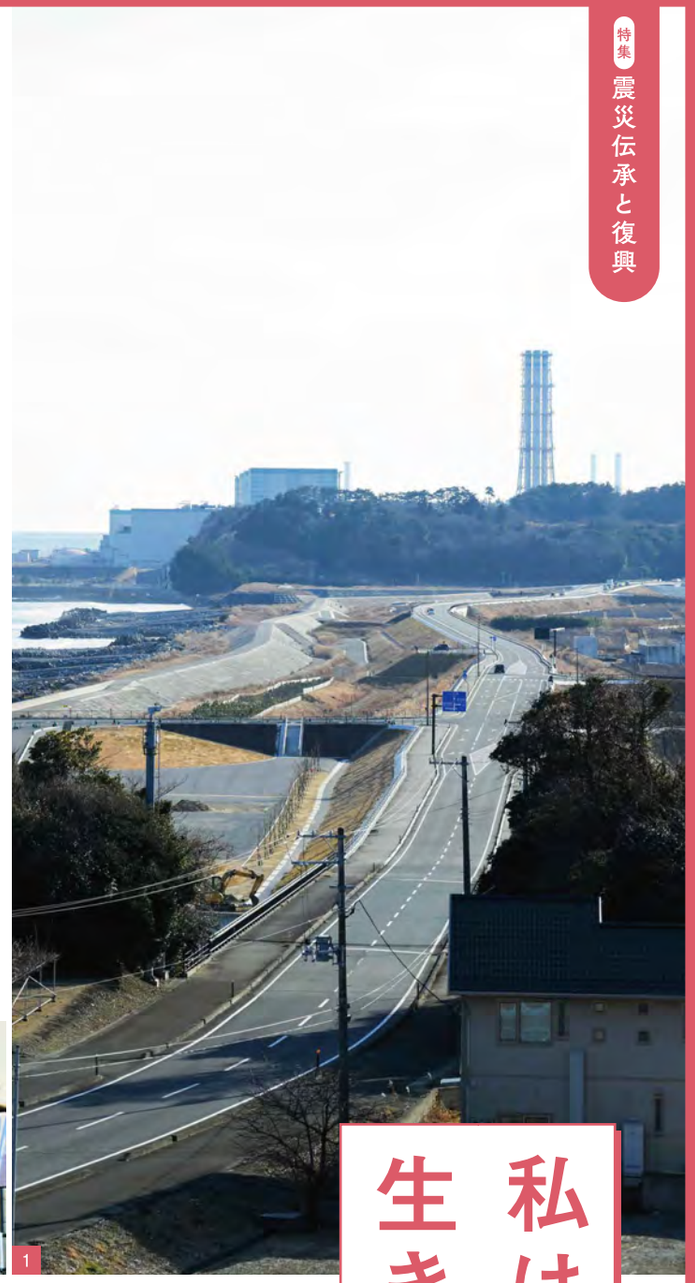
数年ぶりの再会は震災の混乱のなかだった

教え子と再会したのは、定年退職後に戻った郡山市にある高校の体育館だった。全国から単身で福島に来ていた生徒たちは、親元に帰れず教員とともに避難していたのだ。「いてもたってもいられなくてすぐに飛んでいきました。毛布にもぐり込んでいる生徒をお風呂に入るように促したり、着替えの下着を配ったり。そのうちに、川内村にも避難指示が出て、村民も、そこに避難していた富岡町民もみんな郡山市に避難してきました。かつて学校改革に一緒に取り組んだ町長や村長の顔も見えて、やつれて疲れ果てていました。そこからかな、私の運命が変わったのは…」

何かしなきゃと思っているのに、一個人にできることなんてないという無力感が青木さんを突き刺す。それでもただただ被災者のそばに寄り添い続けた。

夜の森地区の桜並木
全長2.2㎞の道沿いに約400本が咲き誇る桜のトンネル。春は県外からも見物客が訪れた町の名所だった。周辺は2023年4月に避難指示が解除。その間手入れができなかった桜の木は傷みもあり伐採されることもあった。

私はこの町で生きていく



町の再出発とともに 真っ先に移住者となって

2017年4月3日の月曜日―。富岡町役場で引いた待合番号は1番だった。震災発生から6年、富岡町の避難指示は一部を除いて解除され、役場の機能が町に戻り、住民が住めるようになった。青木さんはそれまで住んでいた郡山市を後にし、富岡町に住民異動届を提出した。

「避難所ではそのうちにラジオ放送が始まったんです。そこで社会福祉協議会の人たちと、何かできるかな？って話して、週に一度朗読の時間を作ってもらいました。何もできない自分だったけど、お味噌汁とか漬物とか作って、本当に毎日通いましたね」。それから5カ月が経ち仮設住宅ができると、これまで避難所で被災者支援を行っていた「おだがいさまセンター」が組織化された。そこで青木さんは町長からアドバイザーになってくれないかと打診を受けた。

「これもまた運命かなって。2012年の春から働きはじめ、仮設住宅でのイベントや支援物資の配布など、少しでもいいから笑顔になってもらえるよう、いろんなことをやりました。そうしているうちに、『震災の話を聞かせてください』という依頼が増えるようになったんです」。被災地には入れないけれど、話を聞きたいという人びとが郡山に集まった。学生も、メディアも、海外からも。その数が多くなり、独立してはどうかと町から言われるほどになった。

伝承活動というのは100年続けていくべき大事な事業なのだと、覚悟が決まった。青木さんは2015年に独立し、「富岡町3・11を語る会」を設立した。「私はもう、アドバイザーになったときから富岡町と一緒に生きようと決めていました」。2度目の富岡での暮らしは、人が少なく静かな町での再スタートとなった。

1:丘の上から町を望む。遠くには東京電力福島第二原発が見える
2:さまざまな伝承の記録はDVDにして後世に残している
3:町を象徴する桜のモチーフを胸にかかげ活動を続ける
4:かつて田畑だった場所には太陽光パネルが。
これには農業を諦めざるを得なかった苦渋の決断があった

町に吹きはじめた新しい風

町の未来をどう描くか ワインの可能性を信じて

町では今、楽しみなことがある。2025年の4月、富岡駅近くに新しくワイナリーが誕生するのだ。「とみおかワイナリー」代表の遠藤秀文（しゅうぶん）さんはまだ避難指示が続く2016年に、太平洋に面した海が見える丘の上にブドウ畑を開墾した。全町避難で無人の町に変わり果てた故郷。「富岡町には新しい産業が必要。このブドウ畑が広がれば広がるほど町の風景になっていくんだ」

ワインは地域と食を結びつけ、観光資源やコミュニティを生み出すことができる。有志のメンバーがそれぞれ避難していた場所から畑へ通い、最初に350本の苗木を植えた。避難指示が解除されると、全国からボランティアが訪れ、圃場（ほじょう）を徐々に拡大し、植樹本数は1万2千本に達した。また、2022年に山梨でワイン醸造に携わっていた細川順一郎さんを統括リーダーに迎え、納得できる味わいに仕上がり、ワイナリーの建設も着実に進んだ。

青木さんには心のなかで大切にしている言葉がある。「富岡漁港で獲れた魚をカルパッチョにして、畑で採れたブドウでワインを造って、そしてそのワインで乾杯した時が自分にとっての本当の復興なんだって、代表や町の男たちがロマンのように話していたの。それがね、ずっとずっと忘れられないの」

あの頃は復興というと道路だ、復旧だと眉間にしわが寄っていた。ワイナリーがこの町にできるなんて想像するのも難しかった。でも時を経て今、その夢は目の前にやってきた。

圃場に高くそびえる2本の木がずっと畑を見守っている

2025年4月、待望のオープン「とみおかワイナリー」

代表の自宅跡地に建てられたワイナリー。津波被害から唯一残った蔵がシンボルだ

4月6日（日）11時よりプレオープン（予定）

[TEL]0240-23-7606
[住所]福島県富岡町小浜反町36-1
[アクセス]JR富岡駅から徒歩10分
[営業時間]【ショップ】10〜17時
【レストラン】
〈ランチ〉月・木・金曜 11〜15時（LO14時）
土・日曜 10〜16時（LO15時）
〈ディナー〉金・土曜 17〜21時（LO20時）
※平日、日曜のディナーについては完全予約制
[定休日]火・水曜 [駐車場]27台（バス3台）

JR富岡駅からブドウ畑を眺めながらのんびり歩いて10分。醸造所と蔵を構えたワイナリーは町の顔として訪れた者を出迎えてくれる。2階のレストランのカウンターからは太平洋と富岡川を、南側のガーデンビューからはブドウ畑を一望できる。町の景色を楽しみながら、想いの詰まった一杯で乾杯しよう。

5:取材のときは冬。剪定枝を無煙炭化器で燃焼させる作業が行われていた
6:海や川の食材に合わせることを考え、白ワインの品種をメインに栽培。強い海風が吹き、気候や土壌のポテンシャルも申し分ない
7:統括リーダーの細川さんご夫妻と畑にて。ご夫妻は山梨でワイン造りに携わり、ともに富岡町に移住した

「本当に素晴らしい学校だった」。思い出の校舎の前を噛みしめるように歩いていく

私たちの居場所と生きがい

青木さんは伝承活動のことを「語り人」と書いて〝かたりべ〟と読ませている。昔話を伝える「語り部」と混同しないようにという工夫からだが、「人」という字には強い想いがある。「人と人のつながりが崩れていく、原子力災害とはそういう災害なんです。放射能といっても目には見えないから、普通に生活ができそうでしょう？ 家も残されているし、津波被害もほかの地域に比べたら少ないかもしれない。だからいろいろ…言われるんですね。仮住まいの地では富岡町の出身と怖くて言えなかった、ポストには町の広報誌が入らないようにした、多くの人が隠れるように生きてきたんです」

富岡町と一緒に生きていく、と覚悟を決めてから、伝承活動は生きる意味となった。富岡町と郡山市の2カ所に拠点を作り、メンバーの定例会を両方で順に開催している。郡山市に住むことを決め家じまいをした人、富岡町に居場所がなくなってしまった人、それぞれに帰る理由ができた。久しぶりの町では、新しいお店ができたら、そこでみんなでごはんを食べた。

活動では口述による伝承だけではなく、朗読劇、演劇、紙芝居など、いろんな表現方法にチャレンジしている。「相手の心にポンッと響かせるために、よりよく伝えるには、〝表現力〟が必要。やっぱり写真やデータを見せても分かりづらい。心で伝えていくために、表現力を磨いています」

故郷で起きたことを知らないままでいたくない

現在、青木さんは若い世代の語り人の育成に力を入れている。「年齢を重ねて引退されることを考えると、次を育てていかなきゃならない。当時の記憶がおぼろげだったとしても福島のことを語りたいと思ってくれる高校生を募って、紙芝居による伝承活動に本格的に取り組みはじめました」。2つの高校から集まった生徒たちは紙芝居専門家の研修を受け、自らの手で紙芝居づくりに挑戦した。作品はYouTubeにもアップし、東京・お台場のイベント会場では、福島の海産物を味わってもらいながら紙芝居での語りを披露した。「この取り組みは力を入れてずっと続けていきたいです。福島の本当の姿を知ってくれる人が一人でも増えるなら、今の生きづらさが少しでもなくなるんじゃないかって思うんです」

語ることは心の復興。震災伝承は100年続けなければいけない大事な活動。心血を注いだ教師時代のように熱い想いをもち、青木さんは桜模様を胸に、今日も富岡町で生きていく。

事務所には語り人や劇団などたくさんの活動ののぼりが飾られている

高校生の紙芝居による伝承活動を記録にまとめ、世に発信し続けている

NPO法人 富岡町3・11を語る会

団体の概要

富岡町社会福祉協議会の事業の一環として活動を開始し、2015年に独立し、会を設立。主な活動として、町民が「語り人（べ）」として自身の体験や復興への思いを語る伝承活動のほか、町民劇の上演なども行っている。語り人メンバーも随時募集中。

語り人申込先

連絡先 ▸ 0240-23-5431
住所 ▸ 福島県富岡町中央3-53
さくらモールとみおか内事務所1号
アクセス ▸ JR常磐線富岡駅から徒歩11分
料金 ▸ 60～120分1万円～（交通費、資料冊子代別）
実施日・時間 ▸ 予約時に要相談
※1週間前までに要予約

公式ホームページ

富岡町3・11を語る会の語り人（かたべ）プログラムに参加しよう

Q プログラムの内容は？

A バスまたは車にガイド1名が同乗し、町内を巡りながら、震災当時や現在の町の様子を説明。

Q どんな場所を巡る？

A 桜で有名な夜の森地区、富岡高校、富岡漁港、ブドウ畑など。少しずつ新しく生まれ変わる町を感じ取ろう。

Q 参加の前後で巡れる町のおすすめスポットは？

A 「とみおかワイナリー」（P19）はJR富岡駅から徒歩圏内。復興のパワーを感じ、食とワインのマリアージュを楽しもう。

今 声を聞きに行こう。

福島県の震災伝承施設

東北の被災地では、震災の記憶や教訓を伝える「震災伝承施設」が各地に整備されている。より理解を深めるため、ぜひ訪れてみよう。

浪江町 富岡町から車で25分

震災遺構浪江町立請戸小学校（しんさいいこうなみえちょうりつうけどしょうがっこう）

福島県内唯一の震災遺構。海から300m離れた場所に位置し、1階部分は津波で全壊状態となりながらも残っている。津波で破壊された校舎をできるだけそのまま保存し、当時の子どもたちの避難の様子、震災前後の町の様子などをパネルや映像などで伝えている。

［TEL］0240-23-7041［住所］福島県浪江町請戸持平56［アクセス］常磐自動車道浪江ICから車で25分［料金］入館300円［営業時間］9時30分～16時30分（最終入館は16時）［定休日］火曜（祝日の場合は翌日）［駐車場］20台

双葉町 富岡町から車で20分

東日本大震災・原子力災害伝承館（ひがしにほんだいしんさい・げんしりょくさいがいでんしょうかん）

震災前の地域の暮らしを示す資料や地震、津波、原子力災害に関する資料など約29万点を収蔵し、そのうち約300点を常設展示している。福島イノベーション・コースト構想についても紹介。語り部活動にも力を入れており、常設展示室内で1日4回、講話を開催している。

［TEL］0240-23-4402［住所］福島県双葉町中野高田39［アクセス］常磐自動車道常磐双葉ICから車で10分［料金］入館600円［営業時間］9～17時（最終入館は16時30分）［定休日］火曜（祝日の場合は翌平日）［駐車場］111台

楢葉町 富岡町から車で15分

みんなの交流館ならはCANvas（こうりゅうかん きゃんばす）

楢葉町に関わる人びとが話し合いを重ね、「こころの復興」を目指して造られた交流の場。館内の一部には津波で流された柱などを使用。復興の歩みをまとめたパネル展示などもあり、震災伝承施設としても運営されている。語り部は1カ月前までに要予約（60分7,500円）。

［TEL］0240-25-5670［住所］福島県楢葉町北田中満260［アクセス］常磐自動車道広野ICから車で10分、または、ならはスマートICから車で6分［料金］入館無料［営業時間］9～21時［定休日］第2・4火曜［駐車場］笑ふるタウンならは（交流館西側）駐車場利用

東北のアタラシイモノたち。

東北の新しい未来を創るチャレンジが今、各地で生まれている。地域のさまざまな課題を解決しながら新たな価値を世の中へ。土地の魅力や想いが詰まった逸品をご紹介。

Fw:東北 Fan Meeting CHECK!
ふぁわーどとうほくふぁんみーてぃんぐ
岩手・宮城・福島のあらゆる挑戦を応援する取り組みの様子を記事で紹介！
Fw:東北 Fan Meeting 特集記事

01 宮城県 気仙沼市
廃棄漁具を再資源化して生まれ変わる素材ブランド
amuca®
-あむか-

使用済みのナイロン製漁具を回収して、新たな素材に生まれ変わらせる

海洋汚染の原因の一つにもなっている廃漁具

「海と生きる」気仙沼で漁具に新たな命を吹き込む

震災後のボランティアとして、学生時代に気仙沼に通いはじめた加藤さんは、町の魅力に惹きつけられ、移住を決意。漁師から毎年大量に出る廃棄漁網の処理に困っているという話を聞いて、漁業の町・気仙沼だからこそできる事業だと思い、廃棄漁網を回収し、素材として再資源化するamu株式会社を起業した。再資源化された素材は「amuca®」というブランドで、今後さまざまな企業と商品化していく予定だ。

一般販売向けの製品は現在サングラスフレームなどを開発中だ

素材を利用したデザインタイルは壁材などで使われている

amu株式会社 代表取締役CEO
加藤 広大さん
KATO KODAI

気仙沼で出会った地域の皆さんとつながり、プロジェクトが育っていると実感しています。漁業の町・気仙沼から、廃棄漁具が新たな価値を生み出せるようにこれからも尽力します。

お問合せはこちら
amu株式会社

02 宮城県 石巻市
石巻の新しい文化をつくる地元産ホップのクラフトビール
巻風エール
-まきかぜえーる-

農作業からブルワリーまで休耕地から始まる地域活性化

津波で浸水してしまった休耕地も活用して、2016年からホップ栽培の挑戦を始めた一般社団法人イシノマキ・ファーム。病害や天候、収穫後の保存方法など、何度も困難にぶつかりながらも試行錯誤を繰り返して、翌年に誕生したのがクラフトビール「巻風エール」だ。2022年には自社ブルワリー「ISHINOMAKI HOP WORKS」もオープン。現在は、農作業を通じた就労支援も行っている。

ここで買える
ISHINOMAKI HOP WORKS
-いしのまき ほっぷ わーくす-
TEL.0225-98-5180

ISHINOMAKI HOP WORKS 醸造長
岡 恭平さん
OKA KYOHEI

「巻風エール」には「震災の時にもらったエールを、石巻から風にのせて返したい」という思いを込めました。ビアスタンドの「タップルーム」も、地域の交流の場にしていきたいですね。

石巻市北上町産のホップ「カスケード」使用のフルーティなビール

各 350㎖ 770円

巻風WHEAT　巻風IPA　巻風エール

03 岩手県 久慈市
久慈の味を全国に伝える採れたて山菜のピクルス
さんピク［北三陸山菜ピクルス］
-さんぴく きたさんりくさんさいぴくるす-

感動した山菜のおいしさをいつでも、どこでも食べられるように

東京生まれの藤織さんは、舞台俳優の仕事で訪れたことをきっかけに2015年、岩手県久慈市に移住。地元の山ウドのおいしさに感動し、コロナ禍で卸先がなくなってしまった山ウドを日持ちのする商品に加工して全国に広めたいと考え、ピクルスを発案した。現在、藤織さんは自身の移住や起業の経験を生かし、移住コーディネーターとしても活躍。久慈、北三陸とつながる人びとを増やす活動を行っている。

ここで買える
合同会社プロダクション未知カンパニー

マイルドな酸味と山菜のほのかな苦みが絶妙なバランス

合同会社プロダクション未知カンパニー 代表社員
藤織 ジュンさん
FUJIORI JUN

採れたての山ウドやうるいなどの山菜を、北三陸産の天然真昆布、三陸あわびたけのダシで漬け込みました。「さんピク」が地域全体のPRや移住のきっかけになってほしいです。

80g 864円

04 岩手県 陸前高田市
「陸前高田に新しい産業を」願いを込めたワイナリー
Cuvée M【青海波】（シードル）
-きゅべえむ せいがいは-

ワイナリーで町の魅力を育み地域活性化に挑む

高校2年生の時、地元の陸前高田市で震災を経験した及川さんは「復興のため、地元に産業をつくりたい」と情熱を抱く。高台移転や担い手不足でリンゴの生産量が減っていた当時の状況を知り、ワイナリー創業のために東京のワイン専門商社やフランスのワイナリーで働いた後、地元へUターンした。親戚のリンゴ園や休耕地などを借りて、リンゴとブドウを栽培。町の宝である農地の継承にも一役買っている。

375㎖ 1,650円

ここで買える　ドメーヌミカヅキ

辛口でさっぱりとした味わい。1400本限定ラベル

ドメーヌミカヅキ 代表
及川 恭平さん
OIKAWA KYOHEI

古くから果樹栽培が盛んだったこの町で、ブドウ栽培、ワインづくりによって、人が集まるまちづくりに貢献したいです。2025年は、自社工場を造り、ワインの初リリースも予定しています！

05 福島県 いわき市
在来種綿花で福島の復興を目指すオリジナルコットンブランド
SIOME
-しおめ-

綿花で人の輪を紡ぎ被災地再生、新しい文化の創造へ

震災後、原発事故による農作物への風評被害に悩む福島で、新しい農作物として土壌の放射性物質の影響が少なく、塩害にも強い綿花の栽培を開始した「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」。この事業から独立し、綿花栽培からオリジナルブランド品の制作までを手掛けているのが株式会社起点だ。「福島の記憶に残る生業をつくる」をコンセプトに、休耕地を活用し、在来種「備中茶綿」の栽培を行っている。

各 1,650円

手ぬぐい/潮目の重ね縞/薄青　手ぬぐい/和綿の花の七宝つなぎ

使うほどにふんわりと柔らかくなり、長く愛用したくなる

ここで買える　株式会社起点

株式会社起点 代表取締役
酒井 悠太さん
SAKAI YUTA

「SIOME」の名前は、親潮と黒潮がぶつかる福島県近海の漁場のイメージが由来です。作る人と使う人が潮目のように交わり、人と人の関係性を育むきっかけになれたらうれしいです。

06 福島県 天栄村
福島県の米で作ったグルテンフリーの米粉麺
う米めん
-うまいめん-

電子機器メーカーが生み出した食や農の課題解決につながる一手

電子機器メーカーのアルファ電子は、震災後の風評被害で「福島で製品を作ってほしくない」という声を受けて経営難に陥り、立て直しのための新事業として「う米めん」を開発。原料が米粉とでんぷんのみのグルテンフリーで、アレルギー対応食を必要とする人たちなどから、県内に限らず広く求められている。福島県の米農家と契約し、生産者が米余りを心配せずに安心して栽培に取り組める環境づくりにも役立っている。

アルファ電子株式会社 代表取締役社長
樽川 千香子さん
TARUKAWA CHIKAKO

娘が小麦アレルギーだった経験からグルテンフリーの米粉麺の開発を始めました。「う米めん」の生産、販売を通して、農業や食などに関する社会的な課題の解決、福島の復興に携わっていきたいです。

モチモチとした食感と炊き立てご飯のような香りを楽しめる

ここで買える　アルファ電子株式会社
TEL.0120-400-106

300g 777円

東北のアタラシイコトたち。

震災後に見えてきた社会課題や伝承への取り組み。各地で生まれた復興のノウハウには未来へのヒントが詰まっている。岩手・宮城・福島の事業者による取り組みをご紹介。

01 震災学習列車 観光

岩手県 三陸沿岸

三陸鉄道株式会社

-さんりくてつどうかぶしきがいしゃ-

リアス海岸を眺められる大沢橋梁（おおさわきょうりょう）など絶景ポイントも多い

POINT!

- 被災した三陸鉄道で2012年から始まったイベント列車
- これまでの参加者はのべ10万人にのぼる
- 数少ないインフラ目線の被災体験が聞ける

2014年に南リアス線・北リアス線全線復旧、2019年に2路線を統合し、盛～久慈間をつなぐリアス線が開通

駅舎や橋梁、線路など317カ所が甚大な被害を受けた

震災伝承をきっかけに新たな観光につなげる

震災の翌年、県外から「被災地を視察したい」という声が多くあったが、道路はまだ復旧途中で大型バスが走り回れるような状況ではなかった。そこで三陸鉄道社員が「貸切列車ならば移動しながら被災地を見学してもらえる」、「自分たちの経験から命を守る行動を学んでもらいたい」と思い立ち、震災学習列車を企画した。ツアーのメインは、列車で移動しながら車窓から被災地を眺め、三陸鉄道や町の被災状況、復興への道のり、防災を学ぶこと。社員たちや語り部が自分たちの被災経験なども交えながら伝えている。現在は、復興が進んできたことや、震災当時を知らない世代が増えたことを踏まえ、次世代に向けて震災を改めて丁寧に伝えることも忘れない。また、観光で岩手・三陸を訪れた人がより利用しやすい形を企画するなど、さらに進化を続けている。

三陸鉄道株式会社 代表取締役社長
石川 義晃さん
ISHIKAWA YOSHIAKI

発災5日後からの復興支援列車（無料）の運行、約3年間での全線復旧を果たせたことは、三陸鉄道や地域の強い意志と多くの御支援があってのことであり、私たちの経験を震災学習列車などで広く伝えていきたいと考えています。

震災学習列車では、被災状況が見える場所で停車や徐行運転をして解説する

▶「震災学習列車」申し込みはこちら
三陸鉄道株式会社
TEL.0193-62-8900
※不定期運行、要事前予約

CHECK!

復興庁では東日本大震災の教訓・ノウハウを一覧にして公開中。また地域課題解決に向けた挑戦を行う個人や団体を顕彰し、被災地内外への普及・展開を図っている。

- 教訓・ノウハウ集
- 復興・創生の星顕彰

02 コミュニティ・カーシェアリング インフラ

宮城県 石巻市

一般社団法人日本カーシェアリング協会

-いっぱんしゃだんほうじんにほんかーしぇありんぐきょうかい-

POINT!

- 津波で多くの車が流された石巻発の取り組み
- 車を共有して、みんなで買い物や通院、お出かけに利用する
- ルールや役割は利用者が交流して楽しみながら決める

カーシェアを通して移動も、コミュニティの問題も解決

震災で約6万台の車が被災したと言われる石巻市で、車を失い、困っている仮設住宅の住民をサポートするため、2011年7月にスタートした取り組み。支援する協会は車の貸し出しを行い、利用者たちが自分たちで費用やルールなどを運営する。利用者が話し合いを重ねる機会が多いため、仮設住宅の課題のひとつ「新しいコミュニティづくり」がいつの間にか解決していく点も魅力だ。支援の輪はさらに広がり、能登半島地震で被災した能登町の仮設住宅では、地元小学校のマラソン大会の応援に行くなど、公共交通機関ではカバーが難しい面も柔軟に利用者同士で対応し、楽しみながら利用されている。

仮設住宅住民の困りごと
- 震災で車を失って、買い物や通院に困っている
- 仮設住宅からはバス停が遠く、本数も少ない
- タクシーは費用がかさむからあまり利用できない

これで解決！
車は協会から借りて、車を使いたい人でグループをつくる。運転や維持費はメンバーでやりくりして、みんなで通院、買い物、旅行などで利用しよう！

利用者の声
「みんなで買い物に行くと楽しい」
「ボランティアドライバーで役立てていることがうれしい」
「居心地が良く、楽しいから参加している」

03 フードキャンプ 食・生産者

福島県 郡山市

株式会社孫の手（孫の手トラベル）

-かぶしきがいしゃまごのて（まごのてとらべる）-

POINT!

- 畑で本格フルコースを味わうアウトドアレストランツアー
- 食事の前に、畑の見学や収穫を体験
- 参加者と食材の生産者が一緒に食事を楽しむ

参加者×生産者×シェフが交流し、福島の食の魅力を発信

タクシー業を母体とする「孫の手トラベル」の山口さんは震災後、原発事故によって風評被害を受け続ける生産者と出会った。山口さん自身が畑でもぎたての野菜を食べた時の感動を思い出し、生産者と消費者が直接コミュニケーションをとれたら風評被害はなくなるのではないか、と考えたことがフードキャンプの始まりだ。キッチンカーを購入し、食で復興を応援するシェフやブランド野菜の栽培に取り組む生産者と出会い、「参加者×生産者×シェフ」が交流する現在のスタイルで2015年にスタート。これまでおよそ90回開催し、参加者は半数が東京などの県外、半数は県内からでリピーターも多い。観光のひとつとして楽しんでもらう一方、地元の参加者からは「地域の魅力を再発見できた」という声もある。今後は県内59市町村すべてで開催し、まだ知られていない福島の食の魅力を広く紹介していくことが目標だ。

株式会社孫の手 代表取締役
山口 松之進さん
YAMAGUCHI SHOUNOSHIN

福島ならではの、人と自然の関わりを同時に学ぶことができる場所になりたいと考えています。フードキャンプをきっかけに、福島との関係人口を増やし、復興の先にある「本当の再生」を目指します。

▶「フードキャンプ」申し込みはこちら
孫の手トラベル
TEL.024-945-1313
※不定期開催、要事前予約

1：ホップ畑の真ん中にテーブルセッティングする贅沢なロケーション
2：栽培方法や生産者の想いを聞いて、収穫を体験
3：その日のテーマの食材を使った出来立て本格フルコース
4：参加者と交流できる時間はシェフにとっても喜びになる
5：キッチンカーが参加者と一緒に畑、果樹園、酒蔵へ訪れる

一般社団法人日本カーシェアリング協会
代表理事
吉澤 武彦さん
YOSHIZAWA TAKEHIKO

石巻で生まれたこの活動が全国に広がってきています。被災地・石巻が、恩返しの気持ちも込めて、ほかの地域を支援できることが「復興」だと考えています。これからも、災害時に車で困る地域がなくなっていくように、活動していきます。

一般社団法人
日本カーシェアリング協会
TEL.0225-22-1453

1：被災地に限らず、交通に課題のある地域から必要とされている
2：運営のための集会が地域住民のコミュニケーションの場になっている
3：買い物や通院、日帰り旅行など利用目的はさまざま

私たちの「伝承のカタチ」

～文化とアートの可能性～

石碑、古文書、語り部。災害の多い日本では、
先人たちが後世に向けてその教訓を伝え続けてきた。
震災の記憶が風化することは免れないかもしれない。
それでも私たちは言葉で、絵で、芸術で、伝えていく。
時代を捉え、心に響く、アーティストによる伝承のカタチ。

短歌 tanka で伝える

今この時間を大切に―日常の尊さを31音の言葉にのせて

三月の祈り震わすサイレンに「長いね」あの日を知らぬ子と草

たくさんの風船が空に溶けてゆく決して消えないものの代わりに

あと五分早く起きてれば続いてた愛もありそして逆もまたそう

「その場で感じたことを、強い言葉ではなく、平易な言葉で詠いたいと思っています。震災の教訓や恐怖は伝えていかなければならないのですが、そうではない伝え方があってもいいのかなと。真正面からではない、気付いたら震災について触れていたというような、震災を入り口としない伝承も創作の役割のひとつなのかもしれません。あの日、当たり前が当たり前でなくなったことに気付いたはずなんだけれど、いつしか忘れてしまう。好きな人に好きと言う、会いたい人に会う、そういった〝日常の尊さ〟を詠い、今この時間を大切に生きようと思ってほしいと願っています」

宮城 歌人 **近江瞬（おおみ しゅん）さん**

1989年宮城県石巻市生まれ。早稲田大学文化構想学部卒業。地元紙記者を経て、株式会社口笛書店ライター・編集者に。塔短歌会、短歌部カブカブ所属。第9回塔新人賞、第10回塔短歌会賞受賞。第一歌集『飛び散れ、水たち』（左右社）。ラジオ石巻「短歌部カブカブのたんたか短歌」パーソナリティ。

『飛び散れ、水たち』（左右社）
新聞記者時代に詠んだ
上記3首を含む、
全365首を収録した歌集

映画 movie で伝える

二十歳（はたち）の自分が抱く震災の記憶を映画に残したかった

「今の自分の震災に対する感情を、今の自分ができる範囲で記録しておきたい。震災当時のことが、歳を重ねるにつれて鮮明でなくなっていく感覚があり、二十歳の節目に映像に残そうと思ったのが、自主映画『3月11日』を撮る動機でした。福島での撮影を通して感じたのは、当事者にしかわからない想いを、当事者がきちんと言葉にすることの大切さです。クラウドファンディングの支援者や関係者向けの上映会を行い、感想を読んだ時、自分の想いが届いたんだと感動しました。何年後か、また同じ題材で映画を撮りたいと思っています」

福島 映画監督 **遠藤百華（えんどう ももか）さん**

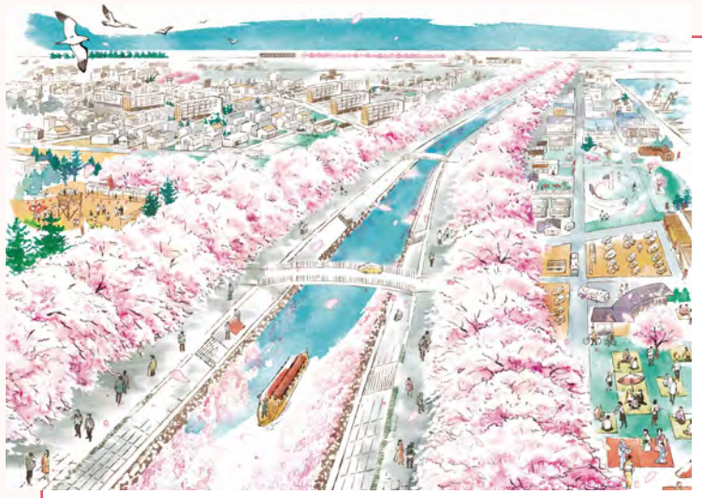
2003年生まれ、福島県伊達市出身。デジタルハリウッド大学在学。監督・脚本を担当した『3月11日』が、経済産業省令和5年度「福島12市町村学生アート制作プロジェクト」の学生映像コンテスト“今と未来”部門でグランプリを受賞。
映画『3月11日』Instagram：@march_11__

遠藤さんが小学1年生の時に東日本大震災が起きた。映画『3月11日』では、震災・原発事故との向き合い方を見つめ直す主人公の姿が描かれている

※クラウドファンディング支援者・関係者向けの上映会は終了。今後の公開は未定

絵 illustration で伝える

人の心のどこかにひっかかるような伝承の入り口になる作品を



『なとり復興桜 未来予想図 俯瞰図』（画像提供：名取市観光物産協会）
「母から昔の町の話を聞いたり、今の名取を見て回ったりしながら描き進められたことで、よりリアリティのある絵になったと思います」（ico.さん）

「『なとり復興桜 未来予想図』は、桜並木のあるふるさとをいつか見てみたいと願う人たちに向けて、奮い立つ気持ちで制作しました。イラストの良いところは、過去・現在だけでなく、未来も描けることです。実際にない物事でも、人が見てみたいと願う想いを可視化できます。未来を描くことで、作品の未来が本当になった時、答え合わせのようなこともできるのかなと。「震災当時の人はこういう想いで未来を見つめていたのかな」と想像してもらうことで、より人びとの想いが伝わる気がするのです」

宮城・福島 イラストレーター **ico.（いこ）さん**

宮城県出身、福島市在住。企業広告や行政の観光PRのイラストなどを手掛けるほか、東日本大震災や台風の被災経験からイラストを通した防災啓発活動を2022年より開始。同年防災士の資格を取得。防災イラストWeb資料集「防災ポートフォリオ」の運営も行う。

物語 story で伝える

誰かが忘れずに、覚えていてくれるように そして同時に、誰もが忘れてもいいように

「被災地を訪れて以来、陸前高田（りくぜんたかた）で見聞きしたことを覚えておきたい、誰かに伝えたいと思い、SNSに投稿していました。復興工事が進み、かさ上げ地に新しい街ができた頃、この記録を一度まとめようと決めました。そこで、書き下ろしのエッセイと物語を加えて本にしました。というのも、その前までは、震災前や震災自体のことが会話にたくさん出てきていましたが、新しい街での暮らしが始まると、これからのことの方が語られるようになってきたからです。それは力強い変化でした。と同時に、被災から復興が始まるまでの「あわい」の時間のことが忘れられてしまうのは惜しいと感じていました。「あわい」の時間はとてもしんどいものであった一方で、大切な会話、創造的な営みがたくさん詰まってもいたからです。

被災の経験はもちろん一人ひとり異なるものですが、異なる経験をした人たちが共に語り合える場は必要だと感じています。私にとって物語とは、読む人たちがそれぞれに自分の経験を投影できると同時に、異なる経験をもつ他者のことを想像できる場を作ってくれるものです。古くから、口伝えの民話によって、津波や土砂災害を伝えてきたという事例は各地にあります。それは、個別の出来事を正確に伝えるものではないかもしれませんが、経験を持たない人にも伝える工夫が詰まっているし、語る人たちの気持ちや考え方を含み込む余白もある。だからこそ、時間や距離を超えて伝わるものがあるのだと思います」

震災後7年間を綴った『**あわいゆくころ**』（晶文社）
「ある人は、この本を読んで被災後の能登へ移住されました。書いてよかったと思っています」（瀬尾さん）

岩手 画家・作家 **瀬尾夏美（せお なつみ）さん**

1988年東京都生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻修了。2012年より映像作家の小森はるかさんと共に岩手県陸前高田市に拠点を移し、2015年宮城県仙台市で土地との協働を通した記録活動を行う一般社団法人NOOK（のおく）を立ち上げる。現在も陸前高田での制作を継続。

©Hiroshi Ikeda

海岸線の壁画群から みんなで一緒の夢を見る

安井鷹之介《THEORIA｜テオリア》(2022)

海岸線の美術館 ［住所］宮城県石巻市雄勝町上雄勝2-22（みうら海産物店裏防潮堤）ほか ［アクセス］JR石巻駅から車で40分 ［料金・時間］観覧自由
震災後に建設された高さ最大10m、全長約3.5kmの防潮堤に壁画を描くアートプロジェクト。年2～3作品ずつ制作、現在は8作品を鑑賞できる

「2019年、初めて石巻市雄勝町を訪れた時、ソフト面の復興が進んでいない印象を受けました。無機質な防潮堤の壁をいいものに変換できれば、人が来るきっかけになるのではと立ち上げたプロジェクトが「海岸線の美術館」です。壁画を作るプロセスでは地元の人や全国の支援者にも関わってもらい、〝心の薬〟になるようなものづくりをしています。僕らが作品を作り続けていれば、50年後、世界遺産になることも夢じゃない。壁画を観光資源にして、多くの人が町に来てくれることを目指しています。みんなで一緒にでかい夢をもつことが大事だと思うんです。僕らに影響を受けた雄勝町の子どもたちにも引き継がれていったら、うれしいですね」

宮城
海岸線の美術館館長
髙橋窓太郎さん

東京都出身。東京藝術大学建築科卒業、同大学院修了。一般社団法人SEAWALL CLUB代表理事。大学で建築意匠設計を学んだ後、広告代理店勤務を経て、海岸線の美術館を立ち上げる。アートパブリックスペースの企画・運営や、プロジェクトデザインを行っている。

るるぶ特別特集
東日本大震災伝承施設ガイド

Webで全ページ公開中！

※「震災伝承施設」は国土交通省東北地方整備局の登録商標です。

復興庁 Reconstruction Agency
復興・創生 その先へ

新しい東北

復興庁では、東日本大震災の被災地において実施されている地域課題を解決し、自律的で持続的な地域社会を目指す「新しい東北」の創造に向けた取り組みについて、被災地内外への情報発信・普及展開等に取り組んでいます。

『今日を生きる私たちが伝えたいこと』
発行／復興庁　企画・編集・制作／JTBパブリッシング
©2025復興庁

［編集］ジェンティーレ恵
［取材・文］ジェンティーレ恵、編集室ムーブ、菊地裕子
［写真］小野寺真希（fog）、桂嶋啓子、関係各市町村・施設、PIXTA
［デザイン］comme-nt（佐々木亨、山岸芽生）
［表紙イラスト］ico.

※本誌掲載のデータは2025年1月末のものです。発行後にデータが変更になる場合がありますので、お出かけの際には電話等で事前に確認されることをおすすめいたします。なお、本誌掲載内容による損害等は補償いたしかねますので、あらかじめご了承くださいますようお願いいたします。※本誌掲載の入館料などは大人料金を掲載しており、原則として取材時点で確認した消費税込みの料金です。※定休日は原則として年末年始・お盆休み・ゴールデンウィークを省略しています。※利用時間は特記以外原則として開館～閉館です。最終入館時間は通常閉館の30分～1時間前ですのでご注意ください。※交通の所要時間はあくまでも目安です。天候の影響や季節により変動する場合がありますので、お出かけの際には各交通機関にお問合せください。